

め氣拔がした、何だか惜しい様である、噫實に愉快極まる夢を見たものである。時に午前四時遂に眠りもやられて、障子のホノ白うなるとき起き出で家人を急がせて朝食した、家人は餘り早きを厭ひて小言千邊實に氣の毒、萬謝。

新着の箱、手馴れた三脚、包の辨當、一緒に括つて肩に引ん擔ぎ、イッ／＼と門を出た、薄靄罩むる曉がたの街！心地好きこと此上もなし。

今朝の夢を繰返しつゝ行く、實に愉快千萬なる夢ありしよ、下地は好きなり夢見はよし、是れて傑作が出来いで何としゃう、傑作を得る前兆の夢であるに相違ない。不識不知、早や一里も歩んだ。氣色のいゝ朝である。天は高く、一氣は澄み、今、秋、酣、寫生の好機！今日は一番傑作を、と勇みに勇んで、早や已に一里半を歩いて目ざす重信の堤に來た、堤下の茶屋より、マゝ一服お召しなされ、何此馬鹿野郎一服どころの騒ぎぢやないわい。

トツカワ堤に駆け登りの、扱下流に行つたものか上流か？

元來此重信川は田の面より河床の方高く常水とはなく、一日も降雨あれば濁流滔々恐ろしきばかり實にヤクザな河である堤の中央は道路をなし兩側に松の大木密生して晝尙昏く、こんな無風流な堤防が平野の東西に貫きて、長さ九里中々寫生の材料どころではない。上流に向つて行くこと三里絶えず饑えたる者が食を求むると云ふ格で前後左右鶉の目鷹の目、好畫題もがなと、首の運動と箱の重さに左右の肩の痛みとは流石に出がけの

勇氣を阻喪せしめた、で芝原に腰を下ろしてウラツチを見れば正午を過ぐることに早や四十分、未だ一枚のスケッチすら得ぬ愚かさよ實に馬鹿／＼しい、コゝ思へば腹も一時に空いてきたので辨當を食つた、——水筒の水を半分割愛して——。

折角楽しんだ日曜の前半既に空しく過ぎたので根氣も抜け果てて、待てよこれでは新着の箱に對しても面目次第もない話しと、更に勇を鼓して、堤を降り街道にいで、どここの的もなく四五丁歩んだが、ヒョット氣がつき、我家からはもう約四里半、歸路に就かねば遅くなる、と今日の馬鹿さ加減を呟きながら引返した、もゝ畫題を求め様ともしなかつた、只無意識に歩いた所が、ドーシタハツミかスケッチ箱は肩から離れてグワラーリツ。ハツト目が覺めた様に立止まつて、すぐ拾ひ上様ともせず見守つた、スルト箱から水がタク／＼／＼、ヤツ、シマツタ。拾ひ上げて展いて見れば哀れ水筒骨破微塵、繪の具や筆が浮いてゐる、重ね重ねの失敗に暫し呆然となつた。

斯くして折角の一日も安息日は只疲勞と破壊と不快とを買つたのみであつた、初めの勢どこへやら悄々と歸る吾が姿哀れの極みであつたらう。

サテは今朝の夢は逆夢であつたのかチエーツ残念ツ——(終)

### 初冬のスケッチ

大阪 大隅 直造

時は昨年十二月上旬の事である。初冬の日を楽しき且つ拙

きに送らんと、大阪の東約四里強なる某村に赴むいた、そこ

は同好にて、又私の最も親しき友が假寓して居るのである。宅

を出てしは、未だ拂曉に近く、初冬とは云へ、寒さは身を切る

思ひ、加ふるに、冷たき風は吹きしきりて齒の根も合はぬ程な

るを、辛じて勇氣を起し足を運ぶ友の家に着きし時は、早や日

は東天に高く、落葉たく煙の薄らぎたる頃なりき。少憩の後、

再びスケッチ箱を肩に、友と近間を流るゝ少なき野川を寫すべ

く出かけた。空は、今は高くコバルト色に變りて、遠景はさゝ

やかなる松の繁みにて、中景には朽かゝれる土橋と芦、其他名

も知れぬ雑草の枯れたるが、靜かにゆらげる水の面に影をひた

せるあり、前景には破れたる捨小舟の、草叢に横はれるがあり

て、初冬の氣は一寸の地にも満ち／＼て居るのである。私は友

と三脚を並べ、共に筆を運ばした。然し拙き私には此位置は誠

に不適當なのであるが、いつもの負嫌ひを出し苦しき事も強き

自信にて、之れに打ち勝ち、漸く着彩となりて一息なし、友

を眺むれば、彼は希望に輝やける眼を以て自然に對しつゝ。彼

私の身邊には、いつの間にか多くの田吾作や、はなたれ小僧や、

村娘など集まりて、何をかさゝやいて居る。着彩の漸く終るに

間もなき頃、暮るゝに早き冬の日ば西山に隠れ、名残の夕焼は、

遠き森、近き小川を赤く染めなして、歸鴉は、をちこちを飛び

て夕を告ぐるが如くに啼渡る。私等にこゝに筆を洗ひ後目を約

して、彼の友と、この好き自然とに別れを告げたのである。さら

ば親しき自然よ、幸に永久に健在なれぞして吾等同好に多くの

教訓を與へよ。いざさらば。

## 會友諸君へ御相談

一會友

日本水彩畫會の規定の一部が改正されて先生に御批評を願ふ繪  
は是迄毎月であつたのが隔月になつた。種々水彩畫發展のため  
繁多な御用の多い先生の勞を増すといふことは會友の増した喜  
びは別として先生のために千萬御氣の毒の譯で。改正に就ては  
何等異議なきのみならず吾々の方でもつと早く氣をつけて御遠  
慮申さなければならぬ次第であると私は思ふのである。それで  
世間を見ると、たかが十七字三十一字の俳句や歌を見て頂くの  
にも一句何錢といふて添削料を差出さねばならぬ。然るにそれ  
等と異つて面倒で時間潰してその上誰れにも出来ない初學者の  
繪の批評を願するにいくら先生の方で報酬は入らぬと言はれ  
たとて平氣で御批評をうけるといふことは實に虫のよい話だと  
思ふが。然し先生の宣言で見ると金錢づくでやつて下さるので  
ないから一枚何程と極めて差上ても快よく受けては下さるまい  
と思ふ。此處諸君何とかよい御智恵を出して先生に御迷惑をあ  
まりかけず吾々も相應の報酬を出して今後は批評を願ふやうに  
したいと思ひます。如何。

\* \* \* \* \*